分枝 *branching*

http://branching.jp
branching 03
publish : 9.June.2013

じいちゃん

Masato YAMAMOTO 1977–
山本正人

仕事をしてると、昼前に母から電話が鳴った。
「おじいちゃん、もうダメかも・・」
の言葉から始まる。今日の昼食はパスかな。

3週間程前、いちゃんと私たち一族は、名古屋にいた。私より一回り若い従妹が、名古屋人のとろろ嫌いとことになり、地元長野から5時間以上かけて、結婚式に出向いていたのだ。

祖父は92歳ながら、自分でマスタスタと歩き、何でも自分でやり、人の手を借りることは無かった。その結婚式で、ごんなことがあった。

教会の入り口には、30センチ以上はある段差があった。会場に入るには、その段差を乗り越えていかなければ入れない。私は“やけにキツい段差だな”と、ふっと思ったが、それ以上気にしなかった。

挙式が終わって、会場の外で記念撮影があるという。新郎新婦の後、出席者が会場を出る際、式場のスタッフが、「段差がありますので、ご注意下さい」と出口で皆に声を掛けていた。
会場の外では、新郎と新婦が挙やかにスタンバイしていて、私はそちらに気を取られていたが、そう言われてハッと思い出し、足下を見ていたからその段差を跨いだ。

すると、右の少し後ろで、「ドタン」っと音がした。
振り向くと、いちゃんが床に倒れていた。その瞬間、会場の作りにカーッと怒りが湧いてきたが、泣妹の手前くらい何とか気持ちを抑ちめた。いちゃんは崩れるあたりを床に打ち、アザになったが、「大丈夫、大丈夫」と応えていた。

考えてみれば、「段差がありますので、・・」などというのは、その段差でつまずくような問題がう生まれてこなかったらだ、と怒鳴けるよりもしなければならないことはあるだろうに。その段差のある箇色の床は、色調デザインへの配慮のつもりなのか、段差を分かりづらくしていた。つくづく出来の悪いものだと感じた。

たぶん、教会のヴァージンロードがガラス張りで、下に照明や花の装飾をしてあったので、そのセットの為に会場全体を3センチから底上げしているのだろう。それにしても、入り口のあの大きな段差は、手抜き以外の何でもない。

私はどうの問々としながらも、披露宴の席に着いた。淡々と宴が進む中、じいちゃんは徐に席を立ち、式場のスタッフリーダーらしき男性に声を掛けた。
「さっきもが転んだ挙式会場の入り口の段差だが、私の不注意もあるかれど、構造に問題があるんじゃないですか。」
私はなぜか頑しかった。

じいちゃんは、曲がったことが嫌いな頑固な人だった。
じいちゃんの弱点を、私は一度も聞いたことがなかった。
ばあちゃんは、じいちゃんの一歩後ろを歩くような人だった。
祖父母夫婦は、戦中戦後の暗い太平洋をくぐりぬけてきまだった。
ばあちゃんは、ここ数年で痴呆が進み、名古屋へは行かず、老人保健施設に出まっていた。

名古屋からの帰り道、マイクロバスに揺られながら、私たちはほとんどが、眠っていた。夕方に名古屋から出たバスは、夜通し5時間から掛けて長野へと向かった。前日からのちょっとした旅行で、みな少なからず疲れていた。でもじいちゃんは一睡もせずに、バスの外の夜景をずっと眺めていた。
「じいちゃん、少し寝たら？」
「いや、いいんだ。」
高速から見える夜景をただ黙かに眺めながら、そう答えた。

帰宅したその日の夜半、じいちゃんは体調を崩し、翌日病院に入院した。肺炎だった。
翌日、入院したと聞いた私は、正直、その診断を聞いて少しホッとしていた。肺炎は、今ではそれほど大変な病気ではないと勝手に思っていた。

ついでに私の家族も名古屋から帰ってきて、子供3人が順調りに熱を出し、すぐに見舞いにいけず、その週末に少しだけ病院に顔を出した。

病院では、私たちの他にも、幾人かの親族が見舞っていた。
それでもいじいちゃんは、心配して集まる身内に「いいから、帰りなさい」と、促すのだ。祖父の気の強い言葉に、皆ためんだ。

ところが翌週、病状は悪化する。肺炎の薬を処方しても改善せず。
肺に水が溜まり酸素吸引無しではいられなくなったという。老化のため、肝臓と膵臓もあまり機能していないともいう。そして、肺の力が無くなり、言葉が出せなくなっていた。
担当医からの説明はどんどん深刻になり、
「もう退院することはないだろう」とまで言われるようになっていた。

その週末も、家族を連れて病院へいった。子供達は、周囲の心配つゆ知らずと、ときろ構わず騒ぎ立てて、じいちゃんに「まだ来たのか」と言われるほど。私たちが帰り際、じいちゃんは子供達に「バイバイ」と手を振ってくれた。子供達も手を振って返した。その翌週末、私が聞いた最後の言葉になった。

もう第弟が別特出来ないから肺炎の薬を止めたそうだと嫁から聞いた日、仕事帰りに病院にいくと、親戚のおばさまが、
「じいちゃん、歌が好きだったから歌ってあげたいんだけどさ。」歌詞が分からないよ」
という。
私はとっさに思ったこと、スマートフォンを取り出して、思いつく歌をじいちゃんの耳元で聴かせてあげた。曲を流すと、ずっと目を瞑っていたじいちゃんが目を開けて歌に目を傾け始めた。そして聴きながら、涙を流すのだ。

これまで、じいちゃんの涙をほとんど見たことが無かったあれは、喜んでくれたことが嬉しくもあり、その弱りとさに切なくなりながら、1950年頃の歌謡曲をいくつも流してあげた。戦争を経験した祖父だったが、戦後の歌の力が好きなのだと、そのとき叙母さんから初めて聞いた。

途中、じいちゃんは、聴きたい曲があったのか、何か私に伝えようとしていたが、もう言葉を発音する力はない。それでも、なんか手を動かして、スマートフォンをより自分の耳元へと近づけて聴いていた。

この時ほど、携帯電話の進化に感謝したことはなかった。

約1時間半ほど歌を聴いた後、じいちゃんはまた目を瞑った。
「まだ明日、来るね。」
それに答えるように、いちゃんは荒いた息のような返事をした。

その日、家に帰っつから、じいちゃんの好きそうな歌を録音して CD に焼き、翌朝病院に行く お袋のテープレにラジカセと一緒に置いた。

翌日の夕方、病院でいちゃんがまた何か言おうとしていたが、発する言は声日よりさらに弱くなっていた。じいちゃんが言おうとしていたことが気になり、その日の夜も、遠う面を集めて CD に焼いた。

その次の日、朝から看病していたお袋からの連絡で、仕事を早退して病院へ向かった。夕方、じいちゃんは息を引き取った。

じいちゃんが入院している間、痴呆のばあちゃんは、自分の家にいながら、「あたし、うちへ帰りたい」と嘆き返していた。
現実と想像の世界で、じいちゃんがいない家を自分の家と思えなかったのかもしれない。

出棺のとき、そんなばあちゃんは、すみれの花をじいちゃんの顔に添えながら、「泣いてかないで」と泣いた。

私は後悔した。
もっと早く、じいちゃんがまだ喋れるうちに、
聴きたい曲を聞いておけば良かった。

約一世紀近くにもなる長い人生の中で、
たかだか60曲ほどの曲の中に聴きたい曲はあったのかな。
今も手元にある、焼くことが出来なかった歌のリストに、
一番聴きたかった曲があったかもしれない。

寝ないでも、作って聴かせてあげれば良かった。

火葬場の煙突から、じいちゃんが天に昇っていく煙りを見ながら、心とは裏腹に、その日はポカポカとした心地よい春の日だった。

山本正人 Masato Yamamoto 1977–
群馬大学教育学部卒　長野市在住　土木関連業務

チョッキー

Yumi KITAJIMA 1961 –
北島由美

チョッキ（単行本）/ ジョン・ウィグナム / 著 ; 金 利光 / 原著 , 翻訳 ; *John Wignham / 原著 ;* パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々　盗まれた雷撃 / 単行本 / リック リオーダン / 著 ; *Rick Riordan / 原著 ;* 金原 瑞人 / 翻訳 ; ＊画像 *amazon より*

チョッキ＝1968 年ジョン＝ウィグアムス著
40 年前に書かれたこの本が２０１０年に新訳で発表された。
新訳で、同時にああるそうだったのか、と納得して読み終えた。チョッキーは 40 年前だけのことではない。

近年自々を事が矢継ぎ早に起こる。まさか！と思っていた事も何回も経験すると、そんなもんかなと思ってしまって。感覚が麻痺してしまう。だから、自分があれ？と思える感覚は大事にしたくちゃと思う。あれ？って思えなくなったらどうしよう・・。恐ろしい事だ。子どもや動物たちは、本来本能としての判断力がある。だからわかっている。大人はあすすすり気付くチャンスを逃しているように思えてしまう。

天才的に例えば発明をしたり、文章を書いたり、音楽を奏わでもり、作品を創造したり、特別な能力を発揮できる人は（チョッキーに）選ばれた人なのだと思う。それをやっぱんだりうらやんでいては、肝心な事に気付けない。選ばれたひとがしている事から学ばなくてはいけないから。

地球は宇宙の中の芥子粒より小さい存在である事を自覚できたら、本当違った角度から物事を見ることができるのかもしれない。
ジョン＝ウイリアムスがまさにチョッキーに選ばれた人なのだと思う。

先日父の兄にあたるおじさんの家の、おじさんの書棚にギリシャ神話のを